

## 阿部あみさん 小説「裏庭」 第五回 林芙美子文学賞 佳作

徳島文学協会の理事を務める阿部あみさんが、小説「裏庭」で第五回林芙美子文学賞の佳作を受賞した。作品は、都会へ出て行った息子の不在を感じながら日々を送る主人公と、「島の家」に一人で暮らす言動が奇妙な叔母の関わり合いを描いている。

同賞は北九州市ゆかりの作家・林芙美子にちなみ、平成二十六年に創設された。第五回は三九二編の応募があり、大賞は該当作なし。受賞作は「小説トリッパー」二〇一九春号（朝日新聞出版）に掲載されている。



北九州市主催の授賞式で挨拶する阿部あみさん

### 作品への思いと推敲力

#### 阿部あみ

ずっと、忙しくて小説が書けない時期があり、周りの方がどんどん受賞されていくのに、自分だけ取り残されてしまったように思っていました。とにかく作品を書いて応募したいことには始まらないと思っただけなのですが、新作を書く時間もなく、二年くらい前に書きあげた作品を推敲して、林芙美子文学賞に応募しました。

月一回、協会の文学イベントに『文芸批評会』というのがあります。主に協会のオリジナル文芸誌「徳島文学」に掲載されている方々を中心に合評会を行っています。今回の小説も二回ほど提出し、様々なご意見を頂きました。文学賞に応募するにあたり、合評会で指摘された後半部分をすべて変更。時間を経ることで自分の書きたかったことが、より濃密に、鮮明に浮かびあがってきました。その思いを作品に封じ込めるように、念じながら書き直しました。推敲という「てにをは」や「ですます」

を直す程度に考えがちですが、大胆に別の話に書き変えるくらいの勢いで直すということを中心に掛けています。自分が書いたものを切り捨てるという事は、出来難い事ですが、そうしないと良い作品にはならない、ということが今回、実感できました。

小説を書くということは、本来、孤独で苦しいことではないかと思えます。私にとっては文学協会の皆さんの存在が心の支えとなり、諦めずに書き続けることができたように思います。そして「近いうちに阿部さんは受賞しますよ」と激励し、推敲に尽力して下さった佐々木会長、本当にありがとうございます。また応援し、一緒になって祝福してくださった皆さまに心より感謝いたします。

小説トリッパー  
2019 春号掲載  
受賞作『裏庭』



## 第二回「阿波しらすぎ文学賞」

二〇一八年からスタートした「阿波しらすぎ文学賞」が今年も開催された。

徳島という阿波踊りや人形浄瑠璃など古来より文化芸能が盛んな場所として知られ、最近では「マチ★アソビ」が全国的に注目されている。現代文学においても瀬戸内寂聴、北條民雄という小説家を輩出し、様々な文化が生まれる素地があることがわかる。

しかし一方で、全国の地方都市同様、文化の都市部集中化や少子化のあおりを大きく受けており、活力に満ちているとは言い難いのも事実だ。このような状況を鑑み、徳島文学協会および徳島新聞社は、全国公募の掌編小説文学賞「阿波しらすぎ文学賞」を立ち上げた。「阿波しらすぎ文学賞」は文学活動を通して、多くの方に生きがいや心の豊かさを実感してもらおうとともに、全国に向けて文学不毛の地と思われてきた徳島の印象を変えることを目標に創設された文学賞である。

賞の創設にあたり、様々なアイデアを凝らした。まず最終選考委員長を吉村萬吉氏に依頼、また規定枚数を十五枚以内の掌編小説とし、徳島に関する要素を作品中に表現していただくという制約を設け、応募者に何らかの工夫を要求した。

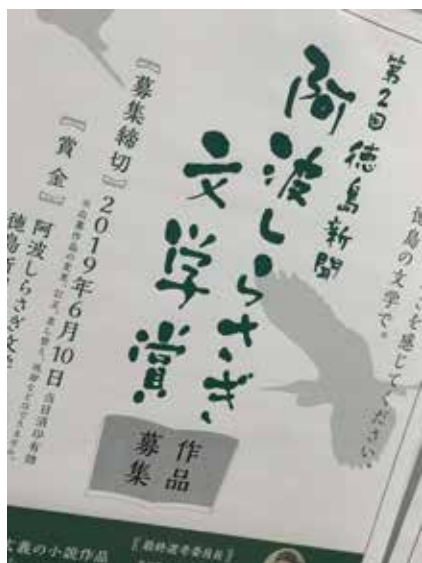
第一回は全国から四二二編の作品が集まり、大滝瓶太さんの「青は藍より藍より青」が受賞作に選ばれた。二〇一九年に開催された第二回は、六月十日に締め切られ全国から昨年を上回る四二六編の作品が寄せられた。

徳島県関係者からの応募が二二五作品、県外からの応募が二〇一作品とほぼ同数になった。第一回よりも県外からの応募が増え、全国三十八都道府県からの幅広く応募があったのも特徴だ。応募者の平均年齢は約四十六歳と非常に若く幅広い。ちなみに最高齢は九十二歳、最年少は十一歳だった。「阿

波しらすぎ文学賞」が広い世代から応募されていることがわかる。

女性初の受賞者が誕生するのか、徳島ゆかりの書き手が大賞を射止めるのか、今年も興味が尽きない。一次選考で二十作品程度まで絞られ、最終選考を経て八月中旬から下旬には「第二回 阿波しらすぎ文学賞」受賞作が決定する運びとなる。ぜひ楽しみにお待ちいただきたい。

また九月八日(日)には新聞放送会館にて授賞式及び記念トークイベントが開催される。今年スペシャルゲストに角田光代さんが来徳されることが決定している。このイベントにも足を運んでいただけると幸いだ。



### 『徳島文学 Volume 3』

二〇二〇年春、発行。

徳島文学協会発行の文芸誌『徳島文学 Volume 3』の原稿を募集します。

徳島文学協会では、年一回文芸雑誌を発行しています。芥川賞作家やプロの文学者を筆者に招き、地方の文芸誌としては類を見ない商業雑誌に匹敵するクオリティの雑誌を目指します。会員の皆さまの優秀作品をプロの作家と同じ誌面に無料で掲載いたします。皆さまの傑作をお待ちしています。会員の方全員に、最新号を進呈します。

#### ◆応募資格

徳島文学協会会員限定

#### ◆応募作品

小説・評論・随筆・詩・短歌・俳句など広義の文学作品、および書評。未発表作品に限る。

#### ◆詳細はホームページにて

<https://www.tbungaku.com/introduction/bungaku03.pdf>



「こと」：古代エジプト文明の知恵の神「トート」に由来する。

## 新しい講座をご紹介します

### みんなで楽しむ俳句鑑賞講座

例に挙げた十句の中からみなさんに好きな句を選んで頂き、得点の高い俳句から鑑賞していきます。鑑賞を通して俳句の魅力に気づくことができる講座です。

### 俳句鑑賞講座やってます

原英

珈琲を常飲するようになったのはいつからだろうか。喫茶店でこの真っ黒な泥のような液体に五百円も支払う。俳句を作る時にはそんな毒々しいものを飲む様になっている。やはり集中度合いが違うのだ。先日の俳句鑑賞講座でも朝からマグカップ一杯とペットボトル一本を飲んでしまった。いつもの倍だ。最近ようやく美味しいと思えるようになってきた気がする。

講座では有名無名、新旧を問わず十句をプリントして配り、その中から記名による投票で点数の高いものから順に鑑賞する流れを取った。ベテランも初心者もいて様々な意見や質問、鑑賞が入り乱れた。誰がどのような発言をしたかはつきりと覚えていない。自分とは違う鑑賞に触れるたびにメモも取り忘れてゾクゾクしていたからだ。感動や衝撃というより恍惚と言っても良いかもしれない。



講座の様子

本来、句会とはそのようなものだ。句会を自分の句ではなく他人の句でやったのが今回の鑑賞講座の正体だ。講座では句会のように自分の句を誰かが鑑賞してくれることはないが、他人の句であっても鑑賞し合うことで十分楽しめるところ。俳句はいわゆる純粋読者がほぼいない。小説においては読者が作者でもあることは少ないが、俳句においては読者も作者であることがほとんどなのだ。俳句に関わるとまず作れと言われることが多い。しかし俳句に興味があっても作りたくない人もいるはずだ。俳句鑑賞講座に事前知識は必要ない。初心者はもちろんベテラン俳人も大歓迎だ。

珈琲の香りだけを楽しむか、或いは飲むか、淹れてみて他人に飲んでもらうか、珈琲にも楽しみ方がたくさんあるように、俳句にも楽しみ方がたくさんある。今、私が手にしている珈琲も泥のような毒のような見た目だが、止めることができないういである。

## 今宵リズールで

北迫薫

前夜、徳島文学協会の方々と共に宴に興じ、今夜は心齋橋のリズールのカウンターに座っている。駅から徒歩三分のはずが方向音痴神降臨。三十分以上は彷徨い歩きへ口へ口になり万年筆のオブジェ発見。抱きしめたい万感の思いを堪えて店内へ。情けない心情の発露は「なにか食べさせてもらえますか」である。これが憧れの文学バーでの第一声である。

カウンターにおられる玄月先生は「けったいな婆さんが来た」と思われたに違いないが、徳島文学協会の話をしたら破顔。本格的なパスタをあっという間にだしてくださり、ビールで喉を潤しながら津島佑子さんや太宰治氏の話などで気が合う、いや合ったつもり。光の領分以降は難解になっちゃって。太宰はユーモア小説ですよ、など。

左の席の花屋で働いているという娘さんが話しかけてくれる。「重労働ね。手はかさかさになっちゃうしね。私も、花屋さんでバイトしていたの」「わかってくれる人がいた」と気持ちのよい会話が続く。私、ピー

ルおかわり。右の青年は文庫本を片手にグラスを傾け我関せずの構え。文学バーの正しい姿かなと思えど、今更沈黙考はさまにならず。パスタのお皿、空。目の前にアルコールのみというのは寂しい。「玄月先生、すぐ出来るものを出してください」と、なに様だろうかこの私。先生は嫌な顔をなさらず「枝豆でいいですか」とお優しい。すぐに出てきた。調子に乗った私は「量が少なくて薄めのものを作ってください」とまた投球。とてもいい塩梅のブラッディ・マリイが目の前に。美味しい。娘さんが「旅行に行きたいです、金沢とか」と言うので「東京からは遠かったの——」と言う私を遮って木鶏のようだった青年が「新幹線が通ってから金沢近くなりました。僕は金沢にいました」と喋り出した。聞いてたのね。なんら意味もないがしてやったりと思う。

私の生業はパン屋だが、文学パン屋というのがあっても良いのではと思った夜だった。

\*

北迫薫さんは、東京都三鷹市在住。昭和の文士達を釘づけにした美貌の叔母の生涯を描いた「夜間飛行」が、二〇一九年二月に新潮社より発行された。「夜間飛行」は楽天、アマゾン、紀伊国屋書店などネット通販で購入できる。

# 文学イベント案内

## 「みんなで楽しむ俳句鑑賞講座」

当日お渡しするプリントの中からみなさんの好きな句を選んで頂き、得点の高い俳句からみなさんと一緒に鑑賞していきます。  
自作の俳句は要りません。鑑賞を通して俳句の魅力に気づくことができる講座です。

■開催日 ①二〇一九年八月十八日(日)  
②二〇一九年十月二十日(日)

毎回 十四時～十五時半

■場所 とくぎんトモニプラザ六階会議室五

■講師 俳人・原英(はらえい)

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円、  
学生五〇〇円

■定員 十五人

## 「小説広場」～みんなで合評会～

あなたの書いた小説を合評会に出してみませんか。作者であるあなたにも、見えなかったものが見えてくるはず。作品を提出してくださる方、作品はなくても合評会に参加してくださる方を募集しています。

※YouTubeで合評会の様子を公開中。公式チャンネルをご覧ください。

■開催日 ①二〇一九年九月十八日(水)

②二〇一九年十一月二十日(水)  
毎回 十時～十二時

■場所 徳島県立文学書道館

■アドバイザー 藤代淑子、久保訓子、阿部あみ

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円、  
学生五〇〇円

■定員 十五人

※合評作品は、随時受付しています。  
詳しくは事務局までお問い合わせください。

## 「短編小説研究所」

純文学作品を執筆されている方で、指定された本を最後まで読んで、創作に役立てたいと意欲を持っている方を対象にした講座です。プロの作品をテーマに短編小説を議論中心で皆さんと考えます。

■開催日 ①二〇一九年九月二十八日(土)

②二〇一九年十月二十六日(土)  
③二〇一九年十一月十六日(土)

毎回 十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 佐々木義登

■参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円、  
学生五〇〇円

■定員 十五人

■作品 ①阿波しらすぎ文学賞受賞作品  
(徳島新聞社賞と徳島文学協会賞  
の受賞作品)

②第一六一回芥川賞受賞作品

③佐々木義登「鈴の音」  
(単行本『郷里』《亜紀書房》より)

## 「文芸批評会」

複数の文学賞受賞者を含む十名以上の徳島文学協会主要メンバーを集め、皆さんの作品を組上に載せて批評会をさせていただきます。事前に作品を読ませていただき、当日メンバー一人一人から、熱のこもったアドバイスを受けることができます。直接、質疑応答にもお応えいたします。

### 参加の流れ

一、メールにて『批評会参加希望』と明記してお申し込みください。お申し込みは会員の方に限ります。

●会員番号 ●名前 ●希望日(末尾記載の開催日よりお選びください)

二、参加日が決まりましたら、指定の振込用紙を送付しますので、参加料をお支払いください。年二回まで参加できます。

三、批評会に提出したい作品を、開催月前月の二十日までに、事務局へメール添付(郵送不可)でお送りください。

■四百字詰原稿用紙換算で三十～百五十枚まで  
■ワード形式縦書き(四十字×三十行推奨)

冒頭にタイトル、名前、原稿用紙換算枚数をご記入ください。原稿には、かならずページ番号をお付けください。

■開催日 ①二〇一九年八月三日(土)

②二〇一九年十月五日(土)  
③二〇一九年十一月九日(土)

毎回 十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■参加費 会員のみ対象三万円(年二回まで)  
締切 毎月二十日まで ※先着順

■主な参加者 佐々木義登、菊野啓、久保訓子、  
藤代淑子、阿部あみ、高田友季

子ほか十名程度(参加メンバーは変更する場合があります)

■お申し込み先メールアドレス  
society@t-bungaku.com

## 阿波しらすぎ文学賞記念行事

### 授賞式&トークイベント開催

■開催日 二〇一九年九月八日(日)

■会場 徳島市・徳島新聞社ホール

■参加費 無料

※受賞者とイベント詳細につきましては、徳島新聞紙面にて八月発表予定

ご入会や講座のお申し込み・お問い合わせは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103 TEL:080-6284-0296

society@t-bungaku.com https://www.t-bungaku.com/